

変形性脊椎症

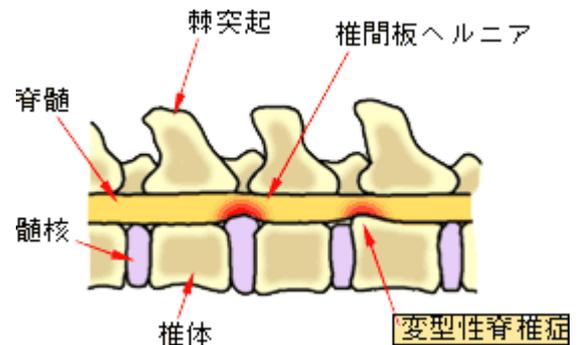
変形性脊椎症は高齢の犬によく見られる脊椎(背骨)の病気です。病気の進行とともに激しい痛みや、神経の麻痺が見られ、最終的に寝たきりになってしまうこともあります。高齢の犬に多くみられるため一種の老化現象と考えられていますが、姿勢、運動、外傷、栄養なども脊椎骨の変形に関係しているようです。

【原因】

- ・ 老齢性の変化
- ・ 先天性の脊椎の奇形
- ・ 椎間板の病気
- ・ 脊椎の炎症
- ・ 脊椎の手術 など

【症状】

初期症状としては、抱いた時に「キャン」と鳴いて痛がったり、怒ったりする、動きたがらない、階段を上らなくなるなどがみられます。症状が進むと、背中での痛み、運動失調、麻痺が認められるようになり、重症になると自力で起き上がれなくなり、四肢の完全麻痺や自力による排便・排尿に困難がみられることがあります。



【診断】

- 1.神経学的検査→肢や皮膚の反応、反射を調べます。肢先や皮膚の感覚があるかどうか、手首・足首の返し方、着地の仕方などを検査します。
- 2.レントゲン検査→脊髄、椎間板ともに通常のレントゲンでは写らないので、椎間板の石灰化、脊椎と脊椎の空間(悪いところは狭くなることが多い)などを見ます。中には全く異常を認めない場合もあります。また、麻酔下で背髄造影を行って圧迫の部位、程度を確認する場合があります。
- 3.CT検査→大学病院等で検査します。病変の程度の判定、部位の特定をします。

【治療】

症状がない時や、変形が軽度の時は治療せずに、経過をみることもあります。サプリメントを飲ませることで進行を遅らせることもできます。痛み、ふらつきなどの症状がみられる時には安静、内科的治療(ステロイド剤、鎮痛消炎剤、ビタミン剤などの投与)を行います。場合によっては手術が必要になることもあります。

【日頃の注意事項】

- ・ 痛みやふらつきなどの症状が出ているときは安静にします。
- ・ 階段の上り下り、ソファーやベッドなどに飛び乗る、後肢でジャンプするなどの行動は極力避けましょう。
- ・ 抱くときはお尻を下から持ち上げるようにすると脊髄に負担がかかるので、お腹を抱えるようにして、後肢をぶら下げるように抱きましょう。
- ・ 症状がなくなったら、適度な運動をして、筋力を鍛えることで再発防止になります。
- ・ 体重が増えすぎないように気をつけましょう。
- ・ 関節疾患用のサプリメントの投与も有効です。